ゲーテにおけるメタモルフォーゼ論の教育学的考察

渋　谷　愛　子

Die pädagogische Betrachtung über die Metamorphosenlehre bei Goethe

SHIBUYA Aiko

はじめに

ゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe, 1749－1832）のメタモルフォーゼ Metamorphose は，ゲーテの自然学，なかでも形態学 Morphologie の中心概念（理論，法則）である。ゲーテは，自ら創始した形態学を「有機的自然の形成と変形 Bildung und Umbildung organischer Naturen[1)]」の学であると定義している。ゲーテのメタモルフォーゼとは，有機的自然の形成と変形を形態の個々の運動と現象においてとらえながら，同時にたえず全体として再構成しつつ有機的生命を把握する理論（法則，原理）である。

本稿は，ゲーテのメタモルフォーゼ論の特質を明らかにしたうえで，ゲーテのビルドゥング Bildung[2)] の思考にそれがどのように結びついていくのかを明らかにする一つの試みである。

その際，考察の前提として最初に確認しておかなければならないことは，ギュンツラー（Claus Günzler）が指摘するように，ゲーテは教育学においてヘルバルトやペスタロッチに比肩しうるような体系的な理論を創出してはいないという事実である[3)]。ゲーテの場合，わずかに教育の方法論的な示唆を，小説『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』（1829）（以下『遍歴時代』と略記）のなかの「教育州」で行っているにすぎない。

しかし，ゲーテのビルドゥングの思考については，19 世紀後半から現在にいたるまで，ドイツを中心に教育学の分野で多くの研究がなされてきている[4)]。したがって，ギュンツラーは，その著作『ゲーテの思考におけるビルドゥングと教育 Bildung und Erziehung im Denken Goethes』（1981）において，今日の教育学的思考にとってのゲーテの意義は「ビルドゥングと教育の存在論的な基礎づけ[5)]」にあるとしている。ギュンツラーがとる方法は，ゲーテの「教育学的思考[6)]」を，「狭義でのゲーテのビルドゥング論[7)]」に焦点をあて，無機物および有機体の形成のプロセスとそこから類比的にとらえられる人間の形成と自己実現のプロセスとして理解する，というものである。しかし，その際の類比というのは，あらゆる形成のプロセスに普遍的に妥当するわけではなく，人間の場合，必ずしも自然的に人間本来の性質 Natur を獲得できるわけではない。したがって，「人間が本来の性質を獲得するために刺激を与えることが，ゲーテにとっては，あらゆるビルドゥングと教育の中心的使命である[8)]」と，ギュンツラーはゲーテの教育学的思考を特徴づけている。

本稿では，以上のようなギュンツラーの主張をおおむねふまえながら，ギュンツラーにおいては詳しく論じてられてはいないゲーテのメタモルフォーゼ論を，ここでは植物のメタモルフォーゼを中心に，まずその特質を明らかにしようと思う。メタモルフォーゼは，有機的自然の形成Bildungと変化を理論化したものであるから，ゲーテのビルドゥングBildungの思考へと結びつけて考察するためには，それは不可欠の作業であると考えられるからである。そのうえで，メタモルフォーゼ論がゲーテのビルドゥングの思考にどのように結びついていくのかを明らかにしていきたい。

第1章　ゲーテのメタモルフォーゼ

1．メタモルフォーゼの起源

Metamorphose(メタモルフォーゼ)という概念の歴史は古く，昆虫の変態や動物の成長，植物の生長等，形態の変化といった意味でのメタモルフォーゼの表象の起源は，ほぼアリストテレスにまで遡ることができる[9]。ドイツ語の“Metamorphose”が由来するラテン語の“metamorphosis”のもっとも古い使用例は，ローマの詩人オウィディウス(Publius Ovidius Naso, 前43-後17頃)が紀元後2～8年頃に著した叙事詩『変身物語 Metamorphoseon』であるとされている。『変身物語』では，人間と自然が根源的に相互に結びついていると考えられていた古代ギリシア時代の神話の影響を多分に受けて，神々，人間，動植物が相互に自在に変身し合う情景が描かれており，この物語はまたゲーテの若き日の愛読書でもあった[10]。

その後，“metamorphosis”が一般的に用いられるようになったのは17世紀にいたって，イギリスの生理学者ハーベー（William Harvey, 1578－1657）[11] 以後のことである。ハーベーは，ドイツ語の“Verwandlung”（変化，変身）に相当する「器官の性質の変化と機能の変化に重点を置いた新しい専門用語[12]」として，オウィディウスが用いた“metamorphosis”に着目し，これを生理学に取り入れた。しかし，“metamorphosis”は，ハーベーが用いたような厳密に生理学的な意味では定着することはなく，生き物のあらゆる変化を指すのに用いられた。

植物の変化を意味する語として“metamorphosis plantarum”（植物のメタモルフォーゼ）という語が用いられるようになったのも，ほぼこの頃である。この語は，ローマの薬学博士シニバルディ（Jacob Sinibaldi）の“Plantarum Metamorphosis”（1676）という論文の題名に由来している[13]。シニバルディは，“metamorphosis”という語から，ニンフや若者の植物への変身といった神話的，寓話的要素を退け，コムギからドクムギへ，カシアからシナモンへといった，親近性のある植物から植物への変態を指し示すものとしてこの語を用いた。

以上に見てきたように，メタモルフォーゼという概念は，動物や植物をはじめとするあらゆる生き物の形態の変化を指すのに用いられてきた長い歴史を有している。そのような概念であるメタモルフォーゼが，ゲーテによってどのように理論化されるにいたったのか，その特質を明らかにするべく，以下で考察することにしたい。

2．ゲーテの植物のメタモルフォーゼ ―― 形態と用途（使命）

ゲーテが古くからあるメタモルフォーゼという概念をとらえ直したのは，ゲーテ自身の植物学

研究の過程においてであった。ゲーテの時代には，植物は，将来それぞれが葉，茎，花等になるはずの個別のものを内部に含んだ一つのまとまりであり，時間の経過とともにそれら個別のものが順次外にあらわれてくる―そのようなものと見なされていた。ゲーテは生きた植物の観察を続けるかたわら，リンネ（Carl von Linné, 1707－1778）の植物学の研究にも没頭したが，リンネが図式的な命名法と専門用語の中に植物を固定してしまったことに，強い違和感を覚えずにはいられなかった。なぜなら，リンネの方法を実際の植物観察に適用しようとするとき，「器官の可変性 Versatilität der Organen ということに主な難点がある[14]」ことがわかったからである。

ゲーテは，一見個体のように見える植物の個別部分が根源的には互いに，そしてまた全体とも同一もしくは相同であるという確信にいたった。そして，一本の植物の同一にして根本的な器官を「(子) 葉」であると認めた[15]。そのうえでゲーテは，植物の本質を「同一の器官がわれわれの目には多様に変化して見えるはたらき[16]」という，まさに現象そのものにあるとして，この現象こそが植物のメタモルフォーゼにほかならないことを確信した。ゲーテ以前のリンネや他の植物学者は，植物が生長するにつれて多様に変化して見えるために，ゲーテのように同一の植物器官の可変性という洞察を得るにはいたっていなかったのである。ゲーテはさらに，このように植物の唯一の器官が多様に変化するのは，植物内部でのはたらきと外界の環境の変化に応じて，器官の用途（使命）が変化することが原因であることにも気づいた。

「形態と用途（使命）Gestalt und Bestimmung[17]」に関するこの洞察は，後年ゲーテによって，あらゆる有機的生命にあてはめて理論化されることになる。その理論は，有機的生命が多様な形態へと変形する「可変性」の原因を，「動物は環境によって，環境に対して形成される。動物の内的完全性と外界に対する合目的性はこの点に由来している[18]」とするものである。ゲーテは，環境としての「四大 Elemente[19]」が有機的生命の形成と形態を決定し，有機的生命のほうでも環境に対して，自らの形態を用途（使命）に応じて形成し，変形していくと考えた。それは，ワシを例にとるなら，ワシは「大気によって，大気に対して，また高山によって，高山に対して形成される[20]」と説明される。同様に，魚であれば，魚は水によって形成され，水に対して自らを形成し，変形していくのである。

有機的生命がこのように内部と外部の双方向から形成されるというゲーテの理論は，有機的生命と環境の相互形成作用と，生命が多様に形態変化する現象を植物の生長過程において明らかにした『植物のメタモルフォーゼ Die Metamorphose der Pflanzen』(1790) のうちに理論化された。ここで留意しておきたいのは，この理論を説明するために用いられている「形態と用途（使命）」という語は，ゲーテのこの著作中の第51節に見出されるが，形態変化の重要な要因を，ゲーテが 'Funktion'（機能，はたらき）[21] ではなく，'Bestimmung'（本来の用途，使命）という言葉で表現していることである。ゲーテが，有機的生命の形態変化に関して，機械的あるいは物理的な響きをもつ 'Funktion' ではなく，より人間の内発性に近いものが感じられる 'Bestimmung' という語を用いていることは，ゲーテが自然を人間から類比的にとらえていたということを示すものであろう。

3．ルソーの植物学との出会い

以上のことから，メタモルフォーゼの法則のもっとも初期の洞察を，ゲーテはリンネの植物学

における「器官の可変性」に見出した問題点から得たということができる。植物を「器官の可変性」という点から見るなら，植物の各器官の間には，その発生と性質において親近性があるということにほかならない。しかし，植物学において「独学の初心者[22]」を自称するゲーテにとって，生きて絶え間なく変化する植物をまるで変化しないものであるかのように合理的に分類する「リンネの抽象性[23]」がたとえ首肯できないものであったにしても，自らの方法の妥当性の確証を得るのは困難なことにちがいなかった。ゲーテの困難を打開する指標となったのは，植物学においてはゲーテと同じく「植物愛好家[24]」または「ディレッタント[25]」であった「最高の意味で敬愛するヨーハン・ヤーコプ・ルソー[26]」であった。

ゲーテが論文「著者は自らの植物学研究の歴史を伝える」(1817)[27] で，その名を強調してあげているルソー（Jean-Jacques Rousseau, 1712－1778）は，ゲーテの植物学研究の途上で，おそらくはリンネに次いでゲーテに大きな影響を与えたと言ってよいであろう。ゲーテは，『植物用語辞典のための断片』(1781) をはじめ，ルソーが著した植物学に関する著作や書簡集から，ルソーがその波乱に富んだ人生の中で50歳を過ぎて植物の世界に惹きつけられていった姿に，自らもまた名高い詩人，政治家としての傍ら植物学研究に没頭している境遇を重ね合わせ，深い共感を覚えたのである。

ルソーがリンネの抽象的な人為分類を良しとせずに，「自然を観察するがいい。そして自然が示してくれる道を行くがいい[28]」としながら，植物群を相互の自然的な類縁性にのみもとづいて分類する，自然方法と呼ばれる分類法[29]を用いていたのは，偶然にもゲーテと同様であった。ルソーが自ら範を示し，人にも薦めたのは「自然という書物[30]」から読み取ることであった。ルソーは散歩のときに目にしたその土地の植物だけを愛情をこめて観察し，記述するという方法をとった。

たしかにルソーは，ゲーテが自らの観察において着目したように葉ではなく，花を植物の本質としてとらえていたし，植物のメタモルフォーゼを，しだいに開花して結実していく植物の外観の一連の変化という以上の意味では用いていなかったようである。しかし，ゲーテがルソーの植物の認識方法から，後にゲーテのメタモルフォーゼ論への架橋となる原植物 Urpflanze の理念のインスピレーションを得たであろうことは，上述のゲーテの論文から読みとることができる[31]。したがって，「貧弱な植物学者[32]」と自称していたルソーが，自らは直観していながらもあえて世に問うことをしなかった植物の根本法則を，後に原植物の理念からメタモルフォーゼへと理論化し，『植物のメタモルフォーゼ』に結実させたのがゲーテであると言えよう。

自然を通して深く響き合うルソーとゲーテの精神は，植物学以前に文学において出会い，そこにおいても一つの結実を見ている。1770年代に啓蒙の硬直した理性中心主義に反発し，「自然」をスローガンに掲げ，人間の感情の解放を主張した「シュトゥルム・ウント・ドラング Sturm und Drang（疾風怒濤）」という文学思潮がそれにほかならない。ゲーテの『若きヴェルターの悩み』(1774) は，まさにシュトゥルム・ウント・ドラングの結晶とも言える作品であった。ゲーテを思わせる主人公ヴェルターを通して描かれたみずみずしい自然との交歓，その「母なる自然[33]」との深い融合感は今，自然学においてゲーテを自然の根源を探る旅へと駆り立てることになった，

自然を介してのルソーとの二度にわたる出会いを経て，1786年9月，ゲーテはイタリアへ旅立つ。その出発に先立つ6月15日に，ゲーテが親しく交際していたシュタイン夫人に宛てた手紙に

は，ゲーテが長い間「自然という書物 Buch der Natur」を判読する努力を重ねてきたことで，今一気に自然への視界が開かれたこと，自然という寡黙な友は言葉に尽くしがたいことなど，自然についてのゲーテの心情が綴られている[34]。ゲーテと自然とのこのような関係を見るとき，ゲーテが多彩な自然に恵まれた南国のイタリアで原植物の着想を得，さらにメタモルフォーゼの根本概念に行き着くことになったのは，いわば必然であったとも言えよう。

4．原　型

ゲーテは，植物における原型 Typus, Modell としての原植物の着想をイタリアで得るより以前に，学生時代から始めていた動物の比較解剖学研究，またその後の骨学研究から，原型という考えに近づいていた[35]。原型という考えの下に人間を含めた動物の共通性を確信したゲーテは，1784年3月27日にヒトの顎間骨を発見する[36]。それまで顎間骨は，人間を除くすべての脊椎動物にあるものとされ，したがってヒトとサルとの決定的な差異を証明するものとされていたのである。

このようなゲーテの原型概念は，実はヘルダー（Johann Gottfried von Herder, 1744－1803）に由来すると言っても過言ではない。1780年代に入って旧交を温めたゲーテとヘルダーは，学問的にも活発に刺激し合う。この交流は，ヘルダーにおいては，『人類歴史哲学考案』(1784)[37] に結実し，ゲーテにおいては比較解剖学での顎間骨の発見，植物学での原植物の確信へとつながっていったものと見られる。顎間骨を発見した当日，ゲーテは即座にその喜びを伝える手紙をヘルダーに送っている[38]。また，ゲーテの自然学雑誌である『形態学のために』(1817－1824) に収められた論文「内容の紹介」にも，ゲーテが骨学研究に没頭するうちに原型を想定する必要を感じるようになったことと並んで，ヘルダーとの啓発的な交流の様子が書かれている[39]。

これらの事実は，当時ゲーテとヘルダーが相互の思想形成にいかに大きな影響を及ぼし合ったかということを裏付けるものである。ゲーテが実際に原植物について明確に言葉に表したのは，イタリア旅行においてであるが，それより早く，ヘルダーは『人類歴史哲学考案』の第一部で原型論を展開しており，それがゲーテに少なからぬ影響を及ぼしたと考えられる。以上のことからも，ヘルダーの自然哲学は，ゲーテの自然学を基本的に方向づけたということができよう[40]。

5．原植物からメタモルフォーゼへ

ゲーテがすでに確信していた有機的自然の共通性を裏付けてくれるような原型を具象化したいという願望は，イタリアの各地で自然条件によって多種多様に形態を変える植物を観察するうちに，植物間相互の根源的な共通性への確信に変わった。1786年9月27日，パドヴァの公園で太陽の下に群生する色とりどりの植物を目の当たりにしたゲーテは，1787年3月25日，それを原植物という理念に具象化した。

原植物の理念について着想を得たゲーテが，メタモルフォーゼ論を完成するまでに，それほど日月を必要とはしなかった。1787年5月から8月にかけてのゲーテのイタリア日誌には，「メタモルフォーゼの根本概念に関するいくつかの見解に私は到達した[41]」と書かれている。1年9ヵ月にわたるイタリア旅行からヴァイマルに戻って2年後の1790年，1年草の生長の精緻な観察とそれにもとづいた理論からなる『植物のメタモルフォーゼ』は出版された。

以上のような経過をたどって成立したゲーテの植物のメタモルフォーゼは，植物の原型としての「超感覚的な原植物[42]」という理念，すなわちあらゆる植物を一つの原理に還元しようとするゲーテの理念上の試みとの関係においてのみとらえられる。なぜなら，植物のメタモルフォーゼとは「超感覚的な原植物の感覚的な形式[43]」，換言すれば，ゲーテが精神の眼でとらえた理念上の原植物を，実際の植物の形態の変化もしくは運動の現象においてとらえようとするものだからである。

しかし，このように形態の変化と運動の現象においてとらえられたメタモルフォーゼであるが，その形態の変化と運動を起こす力についての考察は，未解決の課題としてゲーテに残されていたと言ってよい。生きてはたらく自然を常に研究してきたゲーテにとって，この課題を解決することなしには，メタモルフォーゼ論は完成したことにはならなかったのであろう。完成の契機を，ゲーテは，ブルーメンバッハ（Johann Friedrich Blumenbach, 1752－1840）の著作『形成衝動について Über den Bildungstrieb』(1781)[44] に見出したのである。

6．形成衝動

ゲーテはカントの『判断力批判』(1790) を精読した際に，目的論を扱った第81節のなかにブルーメンバッハについて書かれた箇所を見出した。その箇所で，カントは有機的物質の形成に関して当時論争のあった前成説と後成説について述べ，後成説を主張するブルーメンバッハを高く評価している。ブルーメンバッハは当時の有名な比較解剖学者，骨学者で，現代生理学の創始者とも言われる。彼が1781年に著した『形成衝動について』は，生命ある自然全体の産出と衝動について述べると同時に，自らを発展させていく自然の根本的現象をとらえている。ブルーメンバッハは，生物界にある生殖と再生という二つの現象を形成衝動によるものと考えたのである。

カントが引用していたことから，ゲーテがブルーメンバッハの著作を精読することになったのは，1817年のことである。その翌年，ゲーテは，有機体の生成についての既存の説をメタモルフォーゼによって抜本的に解決しようとする意図から，1818年に自ら「形成衝動 Bildungstrieb」という題名のきわめて短い論文を書いた。この論文のなかで，ゲーテは，生物学者ヴォルフ (Caspar Friedrich Wolff, 1735－1794) が，有機体の発生の原理が "vita essentialis"（本源力）にある，と主張していることに対して異議を唱えている。それは本源力という言葉が，素材にはたらきかける力，といったものを連想させるからである。常に自然を統一においてとらえ，素材と形式，形式と内容というふうに二元論においてとらえることをきらったゲーテは，「言うまでもなく物理学者に」(1820頃) という題名の詩に次のように書いている。「自然には核もなければ／外皮もない，／自然は同時に一切である，と。／君が核か外皮か，／とりわけ君自身を調べたまえ[45]。」

したがって，ゲーテはヴォルフが用いた物理的で機械的な表象をともなう「力」という言葉に代わって，同じ意味でブルーメンバッハが「形成衝動」という言葉を用いたのを「最高にして決定的な表現[46]」であると称えている。ゲーテにとってブルーメンバッハの功績は，それによって「謎の言葉」，すなわち，「形成を惹き起こす衝動もしくは激しい活動」を言い表す言葉に「人間的な性格を与えた[47]」ことである。「自然のなかには物質的な力ばかりではなく，精神的な力も充ちている[48]」という考えを予感的に抱懐していたゲーテは，ブルーメンバッハの形成衝動という言葉にその最適の表現を見出したのである。すでに『植物のメタモルフォーゼ』において，自然の

形態変化の要因としてBestimmung（本来の用途，使命）という半ば擬人化した言葉を用いていたゲーテにとって，ブルーメンバッハのこの表現は自らの洞察を裏付けてくれるものに思えたにちがいない。

そのうえで，ゲーテは自らの論文「形成衝動」の主張を次の言葉でしめくくっている。「ある有機体が現れてくる場合，形成衝動の統一と自由はメタモルフォーゼという概念なしには把握できない[49]」。そして，論文の末尾に，ゲーテは次のような図式を付している。

質料（Stoff）	生命（Leben）
能力（Vermögen）	
力（Kraft）	
威力Gewalt）	
努力（Streben）	
衝動・意欲（Trieb）	
形式（Form）	

この図式は，ゲーテが生命を把握するのに，アリストテレスやライプニッツにしたがって，質料には形相を獲得しようとする志向性がはたらいていると考えていたことを表している[50]。そして質料が形相を獲得すること，すなわちメタモルフォーゼを可能にするものこそ，上記の5つの諸力にほかならない。それぞれの力をわかりやすく言い換えるとすれば，「能力」は環境への適応能力，「力」は生命を生み出す産出力，「威力」は環境に拮抗する力，「努力」はより高きをめざす内的志向性，「衝動・意欲」は形態を作ろうとする意欲，と説明することができよう。このことからもうかがえるように，ゲーテは，有機的自然に，精神的とも言える形態形成を志向する内的自発性が遍在しているととらえていたのである。

先に，ゲーテは自らの「形成衝動」という論文において，有機体の生成についての既存の説をメタモルフォーゼによって抜本的に解決しようと試みた，と述べた。ブルーメンバッハの形成衝動という表現に最大の賛辞を送りながら，なおメタモルフォーゼが有機体の生成の根本の鍵を握っているとゲーテが主張したのはなぜであろうか。その点について，次に考察してみることにしたい。

7．運動のうちにある秩序－メタモルフォーゼ

ゲーテは1806年に「動物のメタモルフォーゼ」という詩を書いているが，そのなかには次のような言葉が見られる[51]。

「形が動物の生き方を定めるし／生き方が形すべてに生き生きとはたらきかけ／秩序ある形成を成し遂げるため／かくて動物は外からの作用によって変えられる／〔…〕／さあ心をひらいて楽しもう　力と制止／恣意と法則　自由と節度　運動のうちにある秩序」

この詩のなかには「秩序ある形成geordnete Bildung」という言葉が見られ，「秩序」はさらに後の方で「運動のうちにある秩序bewegliche Ordnung」と表現されている。秩序ある形成とは，種が変化しても原型（植物においては，原植物）は維持される，すなわち動物（植物）であれば

たとえ種がどのように変化しても動物（植物）の枠を超えることはない，という意味である。そして，「運動のうちにある秩序」とは，メタモルフォーゼにほかならない。A. ヘンケル（Arthur Henkel, 1915－）は，1981年の「形成衝動について[52]」と題した講演のなかで，ゲーテの詩のこの箇所にふれている。ヘンケルは，「運動のうちにある秩序」とは，「維持される原型と発達しつつある形との調和ないし均斉[53]」を表すメタモルフォーゼに，ゲーテ自身が与えた最良のドイツ語訳である，と述べている。

目に見える自然の形と力を研究し続けてきたゲーテにとって，ブルーメンバッハの「形成衝動」という言葉は，形而上学的にすぎると思えたにちがいない。したがって，「形 morphe」を「超えていく meta」という意味をもち，すべての形が発展する過程をあらわす Metamorphose を，「形成衝動」という概念をも乗り越えて，有機体の生成を把握する根本の概念であるとして，ブルーメンバッハから借りた言葉を表題にした論文のなかで，ゲーテは明確に主張したのであろう。

第2章　ゲーテのビルドゥングの思考

1．ゲーテのビルドゥングの思考

ゲーテは，「形成衝動」を著すに先立っての1815年，友人のボアスレー（S. Boisserée）に「植物，動物から人間にいたるまで，生においてはすべてがメタモルフォーゼである[54]」と語っている。この発言からも，ゲーテがメタモルフォーゼを人間にまでおよぶ有機体の生成原理と見なしていたことがわかるが，それは具体的な生の現象としてはどのように把握されるのであろうか。

ハンス・ベルンゼン（Hans Börnsen）は，上記のゲーテの発言にも着目しながら，メタモルフォーゼを定義して「もっとも一般的な意味で，作用しつつある本質の理念上の内容が多様な形態のもとに変化して現れる原理にほかならない[55]」と述べている。このベルンゼンの定義に符合する言葉を含めて，ゲーテは晩年にエッカーマン（Johann Peter Eckermann, 1792－1854）との対話のなかで，生の現象の具体的な事例を挙げながら自然と人間の成長発達について語っている。その対話の内容は，ゲーテ自身がメタモルフォーゼを通してビルドゥング（狭義での）をどのように把握していたのかを知ることができる好個の例であると思われるので，多少長くなるが，以下で適宜引用を行いたい。

1827年4月18日，ゲーテはメタモルフォーゼの原理を，類比的に「美」といった「根源現象[56]」に敷衍させながら，エッカーマンに次のように語った。

「それ自体は現れることはないとしても，その反映は，自然そのものと同じように，無数の多種多様な創造的精神の現れのなかに見られるわけだ[57]。」

そう語った後で，ゲーテはその具体的な事例として，樫の木がもっとも美しく育つ条件を挙げる。それには，きわめて多くの好条件が揃うことが必要で，環境が整いすぎても，逆に過酷すぎてもよくない。もっとも望ましいのは，あらゆる方向に力強く根を張ることのできる広々とした砂混じりの土地に，日光や雨風にさらされて，生長に逆らったり，これを遅らせたりする作用をも受けながら生い立つことで，そうすれば百年後には堂々たる樫本来の美しい姿を目にすることができるというのである。

それに対して，エッカーマンが「結論としては，生あるものは，その自然な発達の頂点に達し

たときこそ美しい，ということでしょうか」と聞き返したとき，ゲーテは首肯しながらも「自然な発達の頂点 Gipfel seiner natürlichen Entwickelung」という言葉の解釈を明確にしなければならないと語る。そこで，エッカーマンが「それぞれの生物にそなわった独自の性格が十分顕著に現れる発達の段階，ということになりましょう」と言い直したのに対して，ゲーテはそれに肯き，なおゲーテ自身の次のような言葉を付け加えて結論とするのである。

「その性格が顕著に現れると同時に，生物のさまざまの部分の構造が自然の使命 Naturbestimmung と合致し，したがって合目的的である必要がある[58]。」

そして，人間の場合のその具体的な例として，ゲーテは次のように語る。

「たとえば，年頃の娘の自然の使命は，子どもを生み，子どもに乳を与えることだから，骨盤の広さが十分でなかったり，乳房が相当ふくらんでいなかったりすると，美しいとは言えないだろう。ところが，度を越しているのも美しくはない。それは合目的性を通り越してしまうだろうから[59]。」

以上の対話の内容から，ゲーテのメタモルフォーゼおよびそれを通してのビルドゥング（狭義での）把握がどのようなものであったかをうかがい知ることができる。しかし，ここで注目したいのは，ゲーテが「自然の使命」という言葉で表している内容である。年頃の娘の妊娠と出産という事例を通して語られているのは，形態（娘の身体）の変化についてであって，精神的もしくは心的な変化については語られてはいない。「使命」といっても，「自然の使命」という場合には，ゲーテはそれを生物学的，生理学的な局面にほぼ限定して用いていたことになる。

しかし，すでに確認したように，有機的自然に「精神的とも言える形態形成を志向する内的自発性が遍在する」ととらえていたゲーテであってみれば，メタモルフォーゼをまさに人間に敷衍する場合に，「形態と用途（使命）」の変化および形成衝動の合目的性を「自然の使命」だけで説明できるとは，とうてい考えてはいなかったであろう。ゲーテが若き日に友人に宛てた手紙には，「ぼくの存在のピラミッドはすでにその基礎ができているが，これをできるだけ高く空中にそびえ立たせようというこの願望は他の一切にもまして，ほとんど瞬時の忘却をも許さない。〔…〕もし命があるなら，神意により全力を傾けて最後の完成にまでこぎつけたい[60]」と，自己実現への飽くなき願望が表白されている。自己実現とは，個々人の本性 Natur の十二分の展開，あるいは本来的な使命 Bestimmung の発現と言い換えることができよう。人間においては，この本来的な使命の発現をまって「自然な発達の頂点」と考えられ，したがって，ゲーテにおけるメタモルフォーゼを通してのビルドゥングの思考も，それによって完成すると見なしてよいであろう。

2．人間の使命

ゲーテのビルドゥングの思考について考察する際に，見落とすことができないのが，背景としての時代思潮である。ゲーテは，『詩と真実』の，第2部第7章と8章で，18世紀中葉から後半にかけてのドイツの宗教や文芸をめぐる思想状況を描写している。

それによると，当時のドイツにおいては啓蒙思潮の下，キリスト教は伝統的な啓示宗教としての側面と自然宗教の間で動揺し，神学者たちの間での論争は，自然理性によって神を認識しようとする自然神学が優勢であった。なかでも，新教義派 Neologie と呼ばれる神学者たちは，正統派の教義にライプニッツやヴォルフ（Christian Wollf, 1679－1754）の哲学ならびにイギリスの理

神論を折衷した啓蒙神学を内容とし，正統派の教義と敬虔主義をその方向へ修正しようとした。

この新教義派を代表する神学者の一人にシュパルディング(Johann Joachim Spalding, 1714－1804)の名が挙げられる。シュパルディングは，シャフツベリ(A. A. C. 3. E. of Shaftesbury, 1671－1713）の著作のはじめての本格的な翻訳のほかに，イギリスの思想家の著作をドイツ語に翻訳することによって，イギリスの理神論的な思想をドイツにもたらした。シュパルディングは，1748年，自らの信仰にもとづいた人間の自己完成の道を説いた著作『人間の使命 Die Bestimmung des Menschen[61]』を出版した。

シュパルディングは，この著作において，人間がこの世に生を受けて生きる価値と使命を，現世から次の生へと永遠に自己完成していくことにあるとしている。著作のなかでは，Bildung という語は用いられてはいないが，「感覚の楽しみ」に始まって「精神の楽しみ」から「徳性」，「宗教」へと次第に自己を高め，最終的に自らの本性 Natur と自らの創始者 Urheber が定めた偉大なる目標である「誠実さ」にいたるという無限の自己形成への努力が説かれている。シュパルディングは「成長を無限に可能にする諸能力が自分の中に潜んでいる[62]」のを感じ，理性によってその諸能力が導かれ，自然によって暗示される真・善・美の一致と調和をめざしつつ無限に自己を完成していくところに人間の使命があるとしている。

当初，匿名で出版されたこの小冊子はまたたくまに評判となり，1794年までに13版を重ねた。ゲーテも1778年に政務でベルリンを訪れた折，教会へシュパルディングの説教を聴きに行っており[63]，『詩と真実』にも当時の宗教事情を記した箇所にシュパルディングの名が挙げられている[64]。ゲーテが実際にシュパルディングの著作からどのような印象もしくは影響を受けたのかは明らかではないが，時代思潮として，当時のドイツでは人々の間で，人間の使命あるいは「人間精神のビルドゥングをめざして努力する[65]」ことについて関心が高まっていたことは事実である。

以上のような時代思潮の下，ゲーテ自身が自己実現ないしは人間の使命をどのようにとらえていたのかを，エッカーマンとの以下の対話からうかがい知ることができる。

「人間のもっているさまざまの力を同時に育てることは望ましいことであり，世にもすばらしいことだ。しかし，人間は生まれつきそうはできていないのであって，実は一人ひとりが自分を特殊な存在につくりあげなければならない。しかし，一方また，皆が一緒になれば何ができるかという概念をも得るよう努力しなければならない。」(1825年4月20日)[66]

ここで語られているのは，言うまでもなく，教養小説と呼ばれる『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』(1796)（以下『修業時代』と略記）および『遍歴時代』を貫くモティーフをなすものであり，『修業時代』のなかの「すべての人間を集めてはじめて人類は形成され，すべての力を集めてはじめて世界はつくられる[67]」という箇所が併せて想起されるのである。

ゲーテは，自己実現への努力とそれを通しての人類への参画を，上記の教養小説のほかに『ファウスト』(第1部1806，第2部1833）においても主要なモティーフとしている。「たえず務め励むものを／われらは救うことができる」(V. 11936 f.)，あるいは「自由な土地に自由な民と共に住みたい」(V. 11580）という詩行は，個々人の本来の使命の発現への努力と，それを社会あるいは人類への使命へと拡大していくという，ゲーテのビルドゥングの思考をモティーフ的に表していると見てよいであろう。

おわりに

以上の考察から，ゲーテのメタモルフォーゼ論の特質を明らかにし，次にメタモルフォーゼがゲーテのビルドゥングの思考の中核をなす形で，これに統合されていることを明らかにすることができたと考える。そのうえで，ゲーテのメタモルフォーゼ論を教育学的思考として特徴づけるならば，以下のようにまとめることができよう。

メタモルフォーゼを人間の形成のプロセスにあてはめてみるなら，一人ひとりの人間には人間の類としての原型だけではなく，個々人が持って生まれた生得の性質としての原型が，言うまでもなく理念上，備わっていると考えられる。そして，その原型がどのように変化するかは，個々人の内的自発性と，外部の環境からのはたらきかけによって決定される。しかし，そのことだけを言うのであれば，必ずしもメタモルフォーゼ論を必要とはしないであろう。ゲーテのメタモルフォーゼを教育学的思考として特徴づける意義は，メタモルフォーゼが「維持される原型と発達しつつある形との調和ないし均斉」であるという点にある。それはすなわち，個々人の生得の性質が，その形成のプロセスにおいて，環境との調和ないし均斉を保ちつつ変化し，形成されていくとき，個々人にとって本来的な自己実現が可能になるものとして，とらえることができよう。したがって，個々人に自己実現を促すべくはたらきかける場合，ビルドゥングと教育にあっては，調和ないし均斉ということが常に念頭におかれなければならないということを，ゲーテから学ぶことができるのではないだろうか。

註

テクストは，いわゆるハンブルク版を主に使用した。他の版を使用した場合は，その都度出典を明記した。本文中の引用にはハンブルク版の出典箇所のみ記す。

略号　HA＝Goethes Werke, Hersg.v.Erich Trunz, Hamburger Ausgabe in 14 Bänden, Verlag C. H. Beck München, 1981（Bd. 3 1949－72, Bd. 4 1953－1968）．巻数はローマ数字で表示した。

なお，ゲーテの著作における原文の翻訳および引用にあたっては，全体的には，潮出版社版『ゲーテ全集』全16巻別巻1（1979～1980年）を，個別には，高橋義人編訳／前田富士男訳『ゲーテ　自然と象徴―自然科学論集―』冨山房，1995年（第6刷）を参照もしくは使用した。訳者の方々に学恩を深く感謝申し上げる。

1）「有機的自然の形成と変形」は，ゲーテが1817年から1824年にかけて不定期に発刊した自然学雑誌『形態学のために Zur Morphologie』第1, 第2巻の表紙裏に題辞として掲げられている。

2）ここで'Bildung'をあえて日本語訳せず，「ビルドゥング」という表記を用いるのは，ゲーテ自身のBildungの概念がコンテクストによって多義的に解釈されうるからである。また，本稿が先行研究のなかでも主として依拠するギュンツラーの著作 *"Bildung und Erziehung im Denken Goethes."*（Köln 1981）においても，主に問題にされているのは「狭義でのゲーテのビルドゥング論」（S. 56），すなわち自然の形成とのかかわりでとらえられる人間の形成，という視点に力点が置かれているからである。それは本稿の趣旨でもあるので，'Bildung'をあえて陶冶，教養，形成等に訳出しないことにした。

3）Vgl. Ebd., S. 163.

4）ギュンツラーの上掲書（S. 1－20）において，教育学の文献にほぼ19世紀後半からあらわれてきたゲーテのビルドゥングの思考に関しての先行研究の概観と検討がなされているので，参照されたい。また，土橋寶の『ゲーテ教育学研究―その世界観・遊戯観・人間形成観―』（ミネルヴァ書房，1996年）では，おおむねギュンツラーの同資料に依拠しながら，日本における研究等の補足を加え

た先行研究の整理がなされている（6－22頁）ので，同時に参照されたい。

5）Günzler : a. a. O., S. 164.

6）Ebd.

7）Ebd., S. 56.

8）Ebd., S. 96. ギュンツラーがこの主張を裏づけるためにゲーテから引用している箇所の一つに，1811年5月8日にゲーテがフランスの外交官 K. F. v. ラインハルトに宛てた次の手紙の一節がある。「誰しもがその特性において見られるべきである。そしてその人の本性とともに幼少期の環境と教育機会 Bildungsgelegenheiten と現在その人が位置している段階が考慮されなければならない。」(*Goethes Briefe*, Hamburger Ausgabe, Hersg. v. K. R. Mandelkow u. Bodo Morawe, Bd. 3, Verlag C. H. München 1965 (Erste Aufl.), S. 154).

9）Vgl. Adolf Hansen : *Goethes Metamorphose der Pflanzen*. Teil1, Gießen 1907, S. 173－251. Vgl. HA XⅢ, 'Anmerukungen' S. 580.

10）ゲーテが晩年に著した若き日の自伝『詩と真実 Dichitung und Wahrheit』(1811－1813) には，ゲーテがこの物語を喜々として読んだことが書かれている。「このような晴朗な壮大な地方に神々や半神たちとともにさまよい，神々の行動や情熱を目撃することぐらい，青年の空想にとって楽しいものはない」(HA IX, S. 413)。

11）Harvey の日本語での表記は，日外アソシエーツ（株）編集・発行『増補改訂 西洋人名よみかた辞典』(1992年) に従った。

12）Hansen : a. a. O., S. 179.

13）Vgl. Ebd.

14）HA XⅢ, S. 161.

15）Vgl. Ebd., S. 100 f.

16）Ebd., S. 64.

17）HA XⅢ, S. 79 (「植物のメタモルフォーゼ」第51節).

18）HA XⅢ, S. 177 (「骨学にもとづく比較解剖学総序説第一草案 Erster Entwurf einer allgemeinen Einleitung in die vergleichende Anatomie, ausgehend von der Osteologie」(1795)).

19）Ebd., S. 178.

20）Ebd.

21）ゲーテの植物のメタモルフォーゼについて，植物学および生理学の立場から浩瀚な研究を著している植物学者のアドルフ・ハンゼン (Adolf Hansen) は，ゲーテの 'Bestimmung' と同じ意味を表す用語として 'Funktionswechsel' (機能の変化) を用いている (Hansen : a. a. O., S. 243 ff.)。

22）HA XⅢ, S. 161.

23）Ebd., S. 272.

24）Ebd., S. 157.

25）Ebd., S. 159.

26）Ebd., S. 157.

27）『形態学のために』(1817) 所収。

28）ルソー著 / 今野一雄訳『エミール』(上)，岩波書店，1995年（第55刷），42頁。

29）ルソー著 / 高橋達明他訳『ルソー全集』第12巻，白水社，1983年，552頁（「解説」）参照。

30）同上書，25頁（「植物学についての手紙」(1781)）。

31）Vgl. HA XⅢ, S. 157.

32）ルソー著 / 高橋達明他訳，前掲書，62頁。

33）芦津丈夫著『ゲーテの自然体験』，リブロポート，1988年，33頁。芦津は，古代異教世界を淵源とする「母なる自然」の神話的表象が，18世紀ドイツの精神界に至る近代ヨーロッパにまで脈々と受け継がれてきたことを考証し，とくに18世紀後半を「『母なる自然』再発見の時代」と位置付けている (32－39頁)。

34）Vgl. *Goethes Briefe*, Hamburger Ausgabe, 1986 (Dritte überarbeitete Aufl.), S. 511 f.

35）ゲーテの論文「内容の紹介 Der Inhalt bevorwortet」(1817) に，この間の事情が詳述されている

(HA XⅢ, S. 60－63).

36) 実際には，この顎間骨の発見は，ゲーテより早く，1780年にフランスの解剖学者ダジールによって発見されていたが，ゲーテは当時その事実を知らなかった。

37) Johann Gottfried Herder : *Ideen zur Philosophie der Geschichite der Menschheit.* Bd.1,2, Berlin/Weimar 1965.

38) *Goethes Briefe*, Bd. 1, S. 435 f.

39) Vgl. HA XⅢ, S. 63.

40) 小田部胤久著「ヘルダーの原型論—その素地と射程—」『モルフォロギア』第7号，ナカニシヤ出版，1985年，45頁参照。

41) HA XⅠ, S. 377 (『イタリア紀行 Italienische Reise』).

42) HA XⅢ, S. 164.

43) Ebd.

44) Johann Friedrich Blumenbach : *Über den Bildungstrieb.* Göttingen 1791.

45) HA Ⅰ, S. 359.

46) HA Ⅲ, S. 33.

47) Ebd.

48) 高橋義人著『形態と象徴—ゲーテと「緑の自然科学」』岩波書店，1988年，187頁。

49) HA ⅠⅢ, S. 33 f.

50) 高橋義人著，前掲書，176－177頁参照。

51) HA Ⅰ, S. 202.

52) アルトゥル・ヘンケル／波田節夫訳「形成衝動について」『モルフォロギア』第3号，ナカニシヤ出版，1981年。

53) 同上書，112頁。

54) *Goethes Gespräch* (Hrsg.v. W. Frhr. v. Biedermann), Bd.Ⅲ, Leipzig 1909, S. 192（8月3日).

55) Hans Börnsen : *Leibniz' Substanzbegriff und Goethes Gedanke der Metamorphose.* Stuttgurt 1985, S. 72.

56) 「美は根源現象である Das Schönste ist ein Urphänomen.」(Eckermann,Johann Peter (Hersg. von Heinz Schlafter) : *Gespräch mit Goethe in den letzten Jahren seines Lebens.* München/Wien 1986, S. 555)。

57) Ebd.

58) Ebd., S. 556 f.

59) Ebd., S. 557.

60) *Goethes Briefe*, Bd. 1, S. 324. 1780年9月20日頃，スイスの牧師にして観相学者のラーヴァーター（Johann Caspar Lavater）に宛てた手紙。

61) Johann Joachim Spalding (Hrsg. von Wolfgang Erich Müller) : *Die Bestimmung des Menschen.* Waltrop 1997.

62) Ebd., S. 19.

63) Goethes Werke (Hersg. im Auftrage der Großherzogin Sophie von Sachsen), Ⅲ Abt : *Goethes Tagebücher*, Lizensausgabe der Sansyusya Publishing, Bd. 1, Tokyo 1975, S. 67.

64) HA Ⅸ, S. 258－353. ゲーテがシュパルディングに言及しているのは，S. 276。

65) HA Ⅰ, S. 215. ゲーテとシラー（Friedrich von Schiller, 1759－1805）が当時の文壇への批判のために共作した風刺短詩集『クセーニエン Xenien』(1796) に収められている「流行の哲学 Modephilosophie」のなかの1行。

66) Eckermann : a. a. O., S. 139.

67) HA Ⅶ, S. 552.

（博士後期課程1回生，教育学講座）